

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：23302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593316

研究課題名(和文) がん患者とその子供への支援プログラムの開発 - 芸術療法とPILテストの導入の試み

研究課題名(英文) The effort of support for cancer patients and their children

研究代表者

牧野 智恵 (MAKINO, TOMOE)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60161999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、治療期にある乳がん患者とそのこどもが共にサポートブックを用いた介入プログラムに参加することで、どのような効果があるのかを明らかにすることである。介入1か月後に、母親とそのこどもが介入プログラムに参加し互いに影響し合うことを通じて、身体的、心理的、機能的、社会的側面において肯定的な傾向がみられていた。乳がん患者への支援にこどもを含めて実施することは、有用であると考えられた。また、サポートブックを用いたことによって、こどもは母親に日頃言えない感謝のこぼを伝えていたり、逆に母親も子どもに感謝のこぼと互いの気持ちを伝え合う機会となっていた。

研究成果の概要(英文)：A month after the invention, a positive trend could be seen in physical, emotional, functional and social dimension through the fact that mother and child influenced each other as a result of participation in this intervention program. We considered that the support implementation for a breast cancer including their children is useful from these result of this research. Besides, using the support book gave mother and child joined this program a chance to communicate their feelings each other. For example, one child brought words of gratitude that usually he/she never tell (Thank you always for everything, please take care) to mother and on the contrary, mother sent the child the message of gratitude(It is really good that you(child) were born, I could try hard thanks to you).

研究分野：がん看護

キーワード：がん看護 親子のサポート

1. 研究開始当初の背景

乳がんは、日本の女性のがん罹患率の第1位である。そのような乳がん患者の心理的適応に影響するものとして家族のコミュニケーション機能が低いほど無力・絶望が高いとの報告もある¹⁾。また、われわれがこれまでに実施したがん患者へのPILテストの結果、外来化学療法中の患者の生きる意味を支える内容として「家族のために生きたい」「子供が大きくなるまで」など、家族、特に子供への思いががん患者の過去・現在・未来の生を支えていることが明らかとなった²⁾。小澤ら³⁾が18歳未満の子どもをもつ乳がん患者とその子どもを対象に実施している研究では、母親ががん罹患することで子どもにとって、患者以上の高い頻度でトラウマ体験となっており、強いストレスを感じており、そして、母親と子どもが双方にソーシャルサポートの享受感が高いほど、子どもの情緒・行動上の問題程度が低くなる傾向があるといわれている。さらに、親のがん発病を知った子どもが、誤った自責の念や過度の不安を抱える例が報告されており、心のケアが課題となっている。しかし、がんを持つ親の子どもへの介入に関する実態調査では、医療者の7割は子どもへの介入に肯定的だが、実際には9割が介入できていないとの報告もある。

我々は、がん患者がこれからの治療を進めたり自分の死に向き合うためにも、患者とその家族（特に子供）への支援として、音楽の力や親子での絵本の作成の活動を活かさないかと考えた。

患者とその家族が対話をしながら絵本を作成するという経験が、互いの一瞬一瞬を大切にするという機会となり、そのことを通してお互いの存在についてふたたび考えはじめるとのではないかと思われる。また、これによって、辛い治療や死への不安を乗り越えることができ、さらには近い将来訪れるであろう親子の別れの時までを、より豊かな経験へと意味づけることができるのではないかと考えた。そして、その事が結果として死の受容やさらには家族へのグリーフケアの支援ともなると考えた。

2. 研究の目的

乳がん患者とその子供への生を支えるための、親子のふれあいプログラムを開発すること。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン；介入研究。

2) 対象；子どもをもつ壮年期(20～50歳代)の乳がん患者とその子ども。

3) 調査期間；平成24年8月～平成28年3月。

4) 研究内容；

研究内容及び研究スケジュール・・・親子への介入(90分)；a. 導入(10分)。b. 親子でサポートブック、またはアートセラピー実施(50分)。(サポートブックに出てこない質問で、お互いに聞いてみたいことがあればお互いに聴きあい、サポートブックの自由記載欄に書き込む。

データ分析方法；a. FACIT-sp 日本語版、b. 『親子で対話を楽しもう』中の対話を抽出し質的に分析を行う。

4. 研究成果

1) 平成24年度～27年度に実施した治療期にある乳がん患者とその子どもが共にサポートブックを用いた介入プログラムに参加した親子は30組名であった。有効回答数18名の母親のうち、11名のFACIT-spの尺度得点に改善がみられた。(図1.2)

2) 本プログラム参加後の母親同士の対話を分析した結果、本プログラムの参加を通じて母親は〔病気体験に対する認識の拡がり〕〔家族・周囲の人々からの支えを再認識する〕〔子どもが成長する姿〕を感じていた。また、母親からみた子どもの変化は〔子どもが病院を受け入れていく姿勢〕〔母親の身体を気遣う態度〕〔プログラムが楽しい思いつき〕であった。

3) 介入前後でSTAIやFACIT-spの尺度得点の変化で悪化していた対象者が2名いたが、介入1か月後のインタビューでは、家族・周囲の人々や人生への思いを自己内省し病気体験に前向きな態度 同病者との関わりを通して今ある生の大切さへの気づき がみられていた。

4) サポートブックへの子どもの記述内容と対話内容を分析した結果、記述内容の特徴として【親への思いやりの気持ち】【日常の親の姿】子どもにとって心に残る出来事】の3つのカテゴリーが、また対話内容の特徴として《子どもの発達段階に応じた回答手段の特徴》《子どもなりに楽しんでる様子》《親子で会話を楽しむ》などの6つのカテゴリーが抽出された。

5) 母親のサポートブックにおける記述内容の特徴として、【子どもの良いところを認める】【子ども・家族への感謝の気持ち】など7つのカテゴリーと、親子の対話の特徴を表す【回答をきっかけに会話を楽しんでいる】【子どもが思う意外な親の姿を発見する】など9つのカテゴリーが抽出された。

親子で一緒にサポートブックを作成することの効果として、親子が直接思いを伝え合うことにより親子に良い相互作用が働くこと、早期からの緩和ケアに繋がることが示唆された。

6) 母親同士の対話の特徴
本企画の最後に、母親だけの対話を実施した。その内容を分析した結果が表1である。

こどもを持つ母親同士の対話の特徴として、治療・検査に伴う影響 がん罹患による生活上の悩み がん発病後の子どもの様子 周囲のがん理解への戸惑い 周囲から受けたサポートの思い 前向きに生きる姿勢 など6カテゴリーがあった。特に子どもに関する話しや子どもや夫からのサポートに関するないよに花が咲いているという特徴が見られていた。

7) 今後の課題

今回はがん体験の母親とその子どもを同時に支援する手だてとして、サポートブックや、音楽療法、アートセラピーなどを取り入れてその効果を見た。参加して下さった母親とその子ども全員が「楽しかった」「また来たい」とおっしゃって下さった。しかし、サポートブックは一度作成することによって、完成され、次回に同じ内容を企画としており入れることは難しい。今後、リピーターへの支援をする場合、親も子どもも参加したいと思えるプログラムの検討が課題である。

また、病院の理解を得て、参加者を募る場合、本来ならば病院での開催が費用の面からも、交通の面からも妥当と思われたが。しかし、総合病院での開催を検討した際、参加者が集まらない状況であった。開催の場を病院からこども図書館や病院外の会館に変更することで、参加者が増え、参加者の親から「病院での開催でないから子どもを誘いやすかった」などの言葉があった。初回の開催では、乳腺クリニックに通う親だけを対象としたため、はじめは躊躇していた子どもも、参加後にクリニックの前を通る際、「ここはお母さんが通っている病院だね」と話し、病院への恐怖感がとれたということもあったが。しかし、まだまだ、幼少の子どもにとって総合病院は「怖いところ」という認識が強く、がん体験者の親とその子どもと一緒にサポートする場合の場の設定やそれに伴う費用の問題が今後の課題である。

(参考文献)

- 1) Inoue S. Saeki T. et al.: Factors related to patient's mental adjustment to breast cancer; patient characteristics and family functioning. Support Cancer. 11(3), 178-184, (2003).
- 2) 牧野智恵、岩城直子、加藤亜妃子、他2名; 外来で化学療法を受ける患者の「生きる意味」【第2報】 - PILテストB.Cの分析から -、第25回 日本がん看護学学術集会, p. 120, 2011.
- 3) 小澤美和: がんを持つ若い親とその子どもたちへの支援: 厚生労働省科学研究費補助金 がん臨床研究事業 2010

図1 介入前後の感情 (EWB) の変化

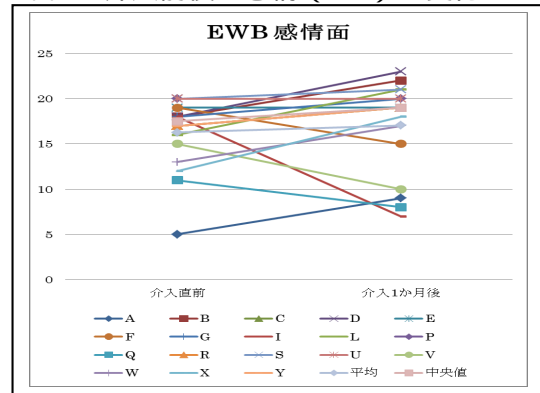
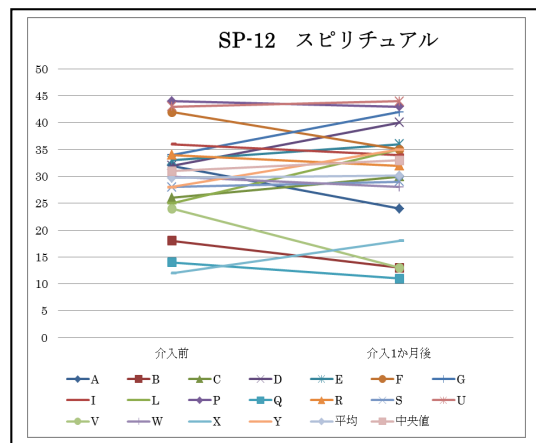


図2 介入前後のスピリチュアルの変化



カテゴリー	サブカテゴリー
1. 治療・検査に伴う影響	1- 治療・検査に伴う身体的苦痛 1- 治療の意思決定の戸惑い 1- 治療に伴う容姿の変化
2. がん罹患による生活上の悩み	2- 子育て・家事の困難さ 2- 仕事復帰への戸惑い 2- 治療継続の身感
3. がん発病後の子どもの様子	3- 子どものがん理解 3- 入院・治療に伴う子どもの様子
4. 周囲のがん理解への戸惑い	4- 夫の理解不足 4- 他者のがん認識への戸惑い 4- 病名が地域でまるごとへの不安
5. 周囲から受けたサポートへの思い	5- がん構築司のサポート 5- 夫からのサポート 5- 子どもからの気遣い
6. 前向きに生きる姿勢	6- 辛いことばかりではないと思える 6- 他者の力になりたいと思える 6- がんであることを理由に伝えないで生きる

表1 サポート介入後の母親同士の対話内容

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

高山清敏, 牧野智恵, 松本友梨子, 加藤亜妃子, 野口絵理奈, 我妻孝則, 北本福美; サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の検討 子どもの記述を手

がかりに、石川看護雑誌、査読有、vol.11, 2014, 49-57.

野口絵理奈・牧野智恵・松本友梨子・加藤亜妃子・高山清敏・我妻孝則・北本福美; サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の検討 母親の特徴を手がかりに、査読有、石川看護雑誌、Vol.11, 2014.59-67,

〔学会発表〕(計3件)

牧野智恵・松本友梨子・加藤亜妃子・我妻孝則・高山清敏; サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の効果 サポートブック作成状況の分析、第28回日本がん看護学会学術集会、2014.

松本友梨子・牧野智恵・加藤亜妃子・我妻孝則; サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の効果、第28回日本がん看護学会学術集会、2014.

TOMOE MAKINO, YURIKO MATUMOTO; THE EFFECT OF SUPPORT FOR BREAST CANCER PATIENTS AND THEIR CHILDREN BY USING "SUPPORT BOOK", 18th International Conference on Cancer Nursing, PANAMA, 2014.

〔その他〕

ホームページ等

第35回日本看護科学学会学術集会 講演集; 交流集会「看護実践におけるロゴセラピー」、牧野智恵、岩城直子、加藤亜妃子。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野智恵 (MAKINO Tomoe)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 60161999

(2) 研究分担者

北本福美 (KITAMOTO Fukumi)
金沢医科大学・医学部・講師
研究者番号: 00186272

川端京子 (KAWABATA Kyouko)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 10714991

加藤亜妃子 (KATOU Akiko)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 30553234

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

我妻孝則 (WAGATUMA Takanori)

松本友梨子 (MATUMOTO Yuriko)